

Salmiakki performance for “Virtual Kaustinen 2021”.

1. **Jos sä olet minun...** / もし、あなたが私の…
(フィンランド伝承歌 アレンジ：サルミアッキ)
2. **あんたがたどこさ** / Mistä tulette?
(日本の童歌 フィンランド語歌詞：こうのちえ アレンジ：サルミアッキ)
3. **Morsiamen itketytys** / 花嫁哀泣歌より
(カレリアの伝承歌 アレンジ：サルミアッキ)

出演者：

あらひろこ、菊地文乃、こうのちえ、清水真理、すがの順子、高田早苗、堀岡真由美、よこたにかずみ

動画のトークの内容：

1. 「Jos sä olet minun…」 (もし、あなたが私の…)
フェスの今年のテーマであるポルスカのリズムの曲。この曲はフィンランドのカンテレ・ミュージシャンを招いて、2008年に日本の北海道で行われたカンテレ・キャンプで教わりました。以来、私たちのお気に入りの1曲として、よく演奏しています。
2. 「あんたがたどこさ」 (「Antagata dokosa / Mistä tulette?」)
日本でよく知られている童歌 (わらべうた) のひとつ「あんたがたどこさ」。
歌いながらまりをつき、「さ」と歌うところで、脚をあげ、まりを脚の下にくぐらせませす。日本語とフィンランド語で歌います。一緒に歌って遊みましょう！
3. 「Morsiamen Itketys」 (花嫁哀泣歌より)
2020年のヴァーチャル・カウスティネンのワークショップの動画で覚えて、その後、フィンランドの女性伝統歌唱グループ、メナイセット (MeNaiset) のバージョンも何度も聴き、私たちらしいスタイルを模索しながら練習を重ねた曲です。私たちはこの歌から、カレリアの古い婚姻儀礼には、結婚前の花嫁を泣かせる歌を歌う習慣があったことなどを知り、伝統文化やルノラウルの歌唱文化にますます興味を持つようになりました。

サルミアッキ プロフィール：

歌とカンテレのサルミアッキは、2014年、カンテレ奏者のあらひろこと札幌カンテレクラブの歌好きなメンバーで結成。歌とフィンランドの伝統弦楽器カンテレで、フィンランドやその周辺地域の伝承歌やフォークソングをモダンフォーク・スタイルで演奏する。

Morsiamen itketyt / 花嫁哀泣歌より

カレリアの伝承歌

Kuule neito, kun mie laulan,	ねえ娘さん、あなたのために歌うわね
jo on ottajat ovilla,	迎えの人たちが戸口にもう来ているわ、
veräjillä viejät miehet.	門扉のところにあなたを連れて行く男たちが
Niinkö luulet, neito rukka,	かわいそうな娘さん、
Luulet kuuksi vietäväisi	1ヶ月、連れていかれると思っている？
(ja) päiväksi otettavaisi?	1日、連れて行かれると？
Niinkö luulet, neito rukka,	かわいそうな娘さん、
työt loppui, huoli väheni?	仕事が終わって悩みは減ったと思う？
Vasta huolta vaaditahan,	たった今、心配せざるを得なくなり
(ja) ajatusta annetahan.	いろいろ考えさせられるでしょう
Kyllä huntu huolta tuopi,	そう、ウェディング・ヴェイルは悩みをもたらし
liinat liikoja sanoja,	ウェディング・ハンカチは余計な小言を
palttina pahoa mieltä.	ウェディング・リネンは嫌な気持ちにさせるでしょう
Itke, neito, naitaessa,	娘さん、お嫁に行く時にお泣きなさい
Vierettele vietäessä.	連れて行かれる時に激しくお泣きなさい
Ku et itke naitaessa,	お嫁に行く時に泣いておかないと
niin itket ikäsi kaiken.	そう、あなたは一生ずっと泣くことになるから

*主な頭韻部分に赤で印。

関連リンク：

サルミアッキの VirtuaaliKaustinen2020 参加動画 <https://youtu.be/lKvzftiFdls>

あらひろこ公式ウェブサイト：<https://arahiroko.com>

サルミアッキ facebook ページ：

<https://www.facebook.com/salmiakki.sa...>

このちえブログ：<http://kieltenkaiku.blog.fc2.com>

カウスティネン・フォークミュージック・フェスティバル・ウェブサイト（英語）：

<https://kaustinen.net/en/>

北欧フィンランドの伝統弦楽器カンテレ

～～ 今も進化しつづける古くて新しい楽器

文：こうのちえ

◎カンテレとは

カンテレは北欧フィンランドに古くから伝わる撥弦楽器でツィター属に分類されます。バルト諸国やロシア北西部にも類似した楽器がみられますが、それぞれ独自に発展したもので名称も異なります。カンテレはおよそ2,000年前から存在していたと推定され、大型化が進む以前は、ひとつの木材をくり抜いて製作されていました。弦は古くは馬の毛やガット、のちにブロンズや真鍮、最終的にはスチールになりました。最も初期の型とされる5弦のカンテレは、フィンランド語やカレリア語を話す人々が古代から口承で受け継いできた特有の韻律の民俗歌謡ルノラウル（ルノは「詩」、ラウルは「歌」の意）の伴奏にも使われ、その演奏の多くは即興的であったとされています。

スウェーデン統治時代（13世紀から19世紀初頭）を経てフィンランドの音楽文化が大きく変容（キリスト教化に伴う教会音楽、スウェーデンの伝統音楽の影響を受けたペリマンニ音楽の台頭）すると、ルノラウルの文化は衰退し、フィンランド東部からロシアにまたがるカレリアなどの一部の地域に残されるのみとなりました。音楽文化の変遷に伴い、民俗音楽の演奏にはカンテレに代わってフィドルが取り入れられるようになりました。新しい音楽に対応するために1800年代にカンテレの弦は徐々に増え大型化し板材を組み合わせて製作されるようになり、演奏される音楽やテクニクも変化していきました。ロシア帝国の大公国時代（1809年～1917年）に民族意識の高まりの中、収集された様々なルノラウルの詩を元に編纂されたフィンランドの民族叙事詩『カレワラ』（1835年、1849年）にもカンテレは登場することから、のちに民族の象徴としての役割も担うようになりました。

カンテレは基本的に全音階楽器で、演奏する曲の調に合わせて弦をチューニングし演奏されます。1920年代には、約5オクターブの音域で半音階調整が可能なコンサートカンテレが考案され操作性が向上し、伝統音楽だけでなく芸術音楽も演奏されるようになりました。

1980年代には、フィンランドの音楽大学シベリウス音楽院（現在はヘルシンキ芸術大学に統合）で、伝統音楽と芸術音楽の双方の領域でカンテレの研究や演奏者、指導者の育成がされるようになりました。小型カンテレについては、主に1900年代初頭に記録されたフィンランド東部やカレリアの歴史的資料を元に再興され、「民族叙事詩カレワラ150周年祭」（1985年）を機に全国で展開された伝統音楽復興プロジェクトの一環で、5弦カンテレは小学校の音楽教育にも使用されるようになりました。

◎多様性こそがカンテレの特徴

現代のフィンランドにおけるカンテレの位置づけは、単なる「民族楽器」ではなく、様々なジャンルの音楽も取り込み進化を続ける「現代の楽器」でもあります。伝統に根ざした演

奏の継承と再興への努力、楽器の改良と多様化、新たな演奏テクニックや演奏スタイルの創造などが今も続けられており、その多様性こそがカンテレの特徴とも言われています。

現在、普及しているカンテレは、大きさ、形、弦の数（5弦～40弦）も様々ですが、フィンランドでは一般的には弦数が5弦～20弦くらいまでのものを小型カンテレ、30弦以上のものを大型カンテレとしており、小型と大型では基本的な演奏テクニックが異なります。現在、フィンランドのカンテレ人口は数千人とされ、様々なスタイルのプロの演奏家が活躍しています。

◎日本のカンテレ人口～フィンランドに次ぎ世界2位、なかでも北海道に多数

現在、主に北海道、関東、関西などで、日本人指導者による継続的なレッスンや演奏活動、フィンランドからカンテレ奏者を招いてのコンサートなどが行われています。日本のカンテレ人口は200人あまりと推定され、フィンランド本国に次いで世界で2番目に多いと言われ、なかでも北海道に愛好者が多数います。

北海道フィンランド協会（1976年発足）は、1980年代からフィンランドの音楽文化（合唱やオーケストラ、カンテレ音楽、ペリマンニ音楽、サーミ音楽などの演奏家招聘）を積極的に紹介、1991年には道内5カ所でフィンランドのカンテレ奏者によるコンサートと「5弦カンテレ講習会」（受講者約50名）を開催、それを受けて協会内に札幌カンテレクラブ（代表あらひろこ）が発足、まず5弦カンテレの練習会が始まりました。その後、協会会員のあらひろこ、佐藤美津子らがフィンランドで本格的にカンテレを学び、継続的なレッスンが行われるようになり、カンテレは北海道に根付いていきました。2000年頃からは、あらひろこ、佐藤美津子らを中心に多くのカンテレ関係者の協力のもと、様々なフィンランド人カンテレ奏者を招きコンサートやワークショップがほぼ毎年のように行われています。また、2010年、2012年には、フィンランド・デイズ（主催：NPO法人コンカリーニョ）の一環でフィンランド西部の伝統音楽である「ペリマンニ音楽」のコンサートやワークショップも行われ、北海道ではフィンランドの伝統音楽文化に直接触れる機会に恵まれていると言えるでしょう。

現在、北海道ではプロのカンテレ奏者のあらひろこ、佐藤美津子による演奏活動はもちろん、愛好家の方々による小規模なアンサンブルやソロ、歌を交えた演奏なども頻繁に行われています。演奏楽曲は、フィンランドや北欧の伝承曲を始めとして、日本の曲やオリジナル曲、即興的な演奏など。また、カンテレは人の声を邪魔しない繊細な音色であることから朗読や読み聞かせとのコラボにも使われています。

参考文献：

- ・フィンランドのカンテレ協会（Kanteleliitto）ウェブサイト：<http://www.kantele.net>
- ・北海道フィンランド協会ウェブサイト：<https://hokkaido-finland.com>

・テレジャンカンテレ-カンテレ奏者はざた雅子ウェブサイト：

<http://teresiankantele.web.fc2.com>

・『11 弦カンテレガイドブック』（Arja Kastinen/Pirjo Pirinen、2007 年、Temps Oy、フィンランド語版タイトル『Heilani Sydän Teräksestä』、英語版タイトル『In Visible Vibration』）

・CD『Vaskikantele 1833』（Arja Kastinen、2008 年、AANIA）ブックレット

・『北欧文化事典』（北欧文化協会、バルト＝スカンディナヴィア研究会、北欧建築・デザイン協会編、2017 年、丸善出版）「フィンランドの民族楽器カンテレ」の項。

・『日本とフィンランドの出会いとつながり』（ユハ・サウナワラ、鈴木大路郎編、2019 年、大学教育出版）「第 13 章親密な音色—日本におけるフィンランドのカンテレの受容- チェン・インシェン」

このちえ プロフィール：

1965 年生まれ。藤女子大学文学部英文学科卒。卒業後、英日翻訳を学ぶ。カンテレとの出逢いは 2008 年。フィンランド伝統音楽愛好家。北海道フィンランド協会の札幌カンテレクラブ会員。フィンランドのカンテレ協会（Kanteleliitto）会員。

ブログ：「Kielten Kaiku～ことばコトダマ、弦の響き 古典音律小型カンテレ」

<http://kieltenkaiku.blog.fc2.com>